

## 第31回ミャンマースタディーツアーにおける吉岡先生の中島君へのお答え



(中島一勝君)今までで一番の困難は何でしたか?

(吉岡先生)ずっと困難の連続だった。困難に間が空いたことはない。それが良かったんだと思う。間が空くというのは日本語でも「間(魔)がさす」とか「空く間(悪魔)」とかいうでしょう。いいことではないんだよ。ずっと逆風だったから良かったんだと思う。

飛行機というのは向かい風が来ないと飛び上れない。前から風が来ないと浮かび上がらない。だから一生懸命生きているということは自分の人生に絶対必要なこと。困難というのは一生懸命生きている証拠。一生懸命生きていない人にはそんなこと起らない。大変なことというのは、だから喜びなのよ。どこに行って何をやっても楽なことは一つもないし、苦手なことだけだけど、その中で一生懸命生きる。どうしたらこれを解決できるかと考える。どうしたら自分の思うような世界に変えていけるかと考える。そうやって一生懸命生きていくだけ。一生懸命生きていたら、日本もアメリカもヨーロッパも東南アジアも変わらない。どこでも大変なことがあるからね、一生懸命生きてる人にはね。だから困難は沢山あったけど、それは幸せなことだと僕は思っている訳。それがないと成長しなかったから。樂じやなかったから良かったと思っている。人間は自分に甘いし弱いから、どうしても楽な世界に飛び込みたいと思うのよ。だから困難に出会えたのは幸せなことだったなと、今から考えたら思うよ。

(中島一勝君)でも困難に出会って、自分の思い通りにならないこともある。

(吉岡先生)自分の能力を抱えて生きているから、自分の能力をフルに発揮したらもう必死で、あるのは「現実はどうしてこう変わってくれないのでだろう」という未来に対する悩みなのよ、もう必死だからね。

自分にどんな能力があるのか分からぬから、だから一生懸命やる必要がある。何でもいいから、授業を一生懸命聞くとか、自分に与えられたところで一生懸命やる。それ以外に、現

突破する方法がない、それしか与えられてないんだから。誰かが来て「これをしろ」と言ってくれることなんてないんじゃない。人間にできることは目の前の仕事しかないわけ。これがいわゆる「蜘蛛の糸」で、目の前にぶら下がっているのに、「こんな蜘蛛の糸、掘んでもどうせ切れるし」と思っているから…。でも、それしかないよ。それしかなければ掘むしかない

力があると自覚すること。まず目の前のことからスタートするしかないで、目の前のこと一生懸命やってみること。そのことを僕は今やっと悟ったわけ。だから若い人にそのことを伝えているわけ。僕は今までそういうことを教えてくれる人に出会わなかった。

こんだけ人がいる中で、一番才能があるのは君なんだ。なぜかというと時間こそが才能なんだから。可能性なの。あと30年しかない人間と、80年以上ある人間とは全然違う。若い人のほうはるかに才能がある。

人は「やったこと」に対してすごいと言う。でもそれは違う。僕が病院建てたことに対してすごいと言う。でも30年あつたら幾つでも病院建てられる。なぜ建てられないかというと、そう思ってしまうから。

この前、学生たちに、「孫正義と僕の違い」を話した。違いは1つしかない。彼は1兆円借りても返せると思っている。僕は返せないと思っている。本当にそれだけ。自分のスケールケースをしっかり持ってやればいい。

若い人は(海外に)来たほうがいい。いろんな世界が見えるから。よく最近言われていることは、例えば医者の世界でいうヒエラルキーがあって、医者であるだけでは勝てないということ。昔の人は「一つのことを突き詰めろ」と言われてきたが、それは1つの才能しかないと思われていたから。今は才能はいくつもあると言われているので、いろいろやったほうがいい。

親とか教師とか、自分より年長の人たちが自分にアドバイスをくれるけど、それは親の時代に一番よかったことで、過去のベストであって未来ではない。だから未来のベストは自分で見つけないといけない。親の言うこと、教師の言うこと、先輩たちの言うことに振り回されてもダメなわけ。決断は自分でしないといけない。間を入れないようにしてね。だって10年前に、アイホンをはじめとして今のいろいろなイノベーションを誰も予想できなかつてしまふ。だから20年後の君の人生なんてわかるはずがない。どんな世界が生まれているかなんて誰もわからない。だから自分で見つけるしかない。そしてその感覚は、古い人間よりはるかに研ぎ澄まされている。だって僕らが子供の時、コンピュータなんて触ったことなかつたんだから。でも今の子は、生まれた時からこんな風に触っているよ。全然違うんだから時代の感覚が。君たちのほうがはるかに時代の感覚に優れているから、自分の中の感覚を信じて前に進めばいい。親のアドバイス、教師のアドバイスを聞くのはいいが、それに従う必要はない。それを自分で咀嚼して、自分の感性に合ったものだけを選び取って、前に進んで行くのがいいと思う。

僕が3つ病院を建てたら、君は30個建てる能

でしょ。目の前のこと本気でやってみる。勉強しかなければ、朝から晩までやってみる。時に人間は弱いから緩んでもいいけど、すぐに立ち直ってやってみる。それしかない。

そうすると不思議なことがあこってね。自分のレベルに合った人達と出会うのよ。それは成績が良ければ成績のいいクラスに入っていくのと同じ。そういう仲間の人たちに囲まれる。若い人は(海外に)来たほうがいい。いろんな世界が見えるから。よく最近言われていることは、例えば医者の世界でいうヒエラルキーがあって、医者であるだけでは勝てないといふ。昔の人は「一つのことを突き詰めろ」と言われてきたが、それは1つの才能しかないと思われていたから。今は才能はいくつもあると言われているので、いろいろやったほうがいい。

# JAMAH NEWS JAPAN & MYANMAR ASPIRATION HOYU ASSOCIATION

2019.6 VOL.10

日本ミャンマー豊友会

将来の子供たちが共存共生のできる豊かで平和な世界へ



## 次を見据えて 新たなスタート

竹花さんのミャンマーにおける洋裁教室 報告書 (2019年3月21日~31日)

去年の11月スタディツアーリーに参加した後、近藤さんから連絡があった。以前ジャマハの現地事務所で家政婦として働いていたニュンピューさんより洋裁を教えてもらいたいと依頼があったとの事。キリスト教の信者である仲間のご婦人たちが数名希望し、若い子もいるらしい。それだけの情報ではあるが、私もニュンピューさんはよく存じてあり、教える事に問題はない。しかし詳しくは聞いてみなければ何も分からない。そこで3月のツアーに合わせて、私もミャンマーへ行くことにしてチケットを取った。

ミャンマーで1日ツアーリー行動を共にして、翌日ツアーリーは旅立ち、私は残る。その日は日曜日なので、ニュンピューさんの協会のミサに参加する。少数民族のための小さな教会で、2時間何も分からぬ歌やお説教を聞く。終わってご婦人たちが挨拶に来てくれた。たぶん洋裁に参加する意志のある方達であろう。あとで知ったことであるが、ニュンピューさんのお兄さんが、信者さん方にとても遠い所から来て下さっているのだから、皆さんは一生懸命学ばなければいけないと話したらしい。

教会の建物の隣にもう1軒建物があり、二つを屋根でつなげてある。このスペースがけっこう広い。コンクリの床で舞台もある。ここにミシンを置き、机・椅子を置いてすぐに始められるという。ミシンは夕方運びという事で、明日9時から始めましょうと約束して帰る。

途中、現地事務所の大家さんであつたルサンさんの家による。病気で退院したばかりなのであつたが、会ってくれた。近藤さんからのお土産もあるが通訳をお願いするためである。ニュンピューさんに同行をお願いして、どういう事情で洋裁を教えて欲しいのかを聞く。私が誤解なく理解するためには通訳は必要である。

ニュンピューさんの話によると、教会は小さく寄付も少なく貧乏である。洋裁を習って作品を作りバザーで売って資金にしたいとの思いからであった。今のところ職業にしようとは考えていないようである。私の本来の目的は子供達に職業訓練をして経済的自立に結びつくようにサポートするというものである。本来の目的とは異なるが、私とニュンピューさんは友人である。その縁で教えましょうと話はまとまった。

私の条件は二つ。信者以外の人が習いたいと希望したら受け入れる事、この洋裁のスキルを受け継いで後の若い人たちに伝え

る事。その中から職業に結びつく人も現れるかもしれないと思う。翌日9時に来ると、すっかりセティング済みですぐ始められる。ミシンは足踏みで古く壊れているかと思ったが、何とか動くし頑丈である。机も椅子も十分にあり、白板・マーカーもある。メンバーもじき集まつた。

一人ひとり名前・年齢・習いたい理由を書いてもらい名簿にする。理由としては、自分の服を作りたい、子供の服を作りたい、洋裁を学びたい、面白そだからなどであった。

16名ほどで始まる。内訳は18歳2名 20代2名 30代5名 その他シニア。後日若い子が4名 10歳・13歳・23歳・25歳が加わりいつきに平均年齢を下げた。

カリキュラムは私が日本で開いている市民講座で体系づけている方法と基本的には同じである。基礎のスキルを学び、簡単な作品から作り始める並行して型紙も学ぶ。ここまで職業にするしないに関係なく基礎の部分である。これを彼女達は旺盛な好奇心と情熱でみごとにクリアしてしまった。六日間では、丁寧さや正確さはレベルには遠いし、ミャンマーでは手に入らない不可欠な道具もある。あるいは知っているが、どこで手に入れたらよいかも分からぬ物もある。それらは次回通訳をつけて解決したい。通訳の目星もつけてある。また若い子の中にプロになりたい子がいるが通訳を通して聞いてみたいと思う。若い子はのみ込みが早いし何度も直しても恥をかねなかった。それはプロの資質の1つである。出来れば誰か一人でもプロになりたいと思う子がいたらその時はアプローチも変わってくるし、私としては嬉しい。ツアーカラヤンゴンに戻っていた近藤さんたちが、日本に戻る前に教会に立ち寄ってくれた。彼女達の熱気に少なからず驚いたことと思う。

簡単なブラウスをぎりぎりまで教え、30日の午後私は日本に戻った。メンバーの中に日本語N-5のレベルの子がいて、彼女とスマートで連絡が取りあえる環境が整い、さっそく格安航空券を取り、次の連絡をした。次回は5月8日から13日と短期である。準備をして無駄のないカリキュラムにしたい。メンバーの中には縫える方もいて、二名を私のいない間の先生に指名した。次回までの間、何でもよいからミシンに親しんでいてくれればよいと思う。再会が楽しみである。

## 寄付・ご入会の振込口座

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 0082-5-135506  
三菱UFJ銀行 中村公園前支店 普通 0027522  
トクヒニホンミャンマーハウウカイ

詳しくはホームページもしくはリーフレットをご覧ください。  
<http://www.hoyukai.com/myanmar/admission.html>

## 第31回 ミャンマースタディーツアー [2019年3月22日▶3月29日] レポート



2019年3月22日(金)、桜の開花宣言が始めた日本を飛び立ち、夏期に入ったばかりの炎暑のヤンゴン空港に降り立つ。成田ではトランジット手続きをしたため出られなくなってしまった近藤会長に代わり、空港に到着していたお土産の段ボール3箱の積み込み手続きを代わってしなければならないというハプニングもあったが、なんとか全員無事ヤンゴン到着。

ガイドのナイスミャンマートラベルのゾーさんの案内で、一路「結団式」の行われる夕食会場「BURMA BISTRO」へ。会場で今回参加のメンバー:近藤会長、和田さん、酒井さん、中島さん親子、私(田中)の6名の自己紹介と、会場に駆け付けて下さった柴田さん親子、竹花さん、ナイスミャンマーのナンヤミンさんの紹介の後、会食中にパナソニックの現地総代理店のワインミン会長が部下の方と合流、会話に花が咲きました。

会食後は今夜の宿泊先:サミット パークビューホテルへ。

2日目(3月23日)はヤンゴン市内のGSS日本語学校へ。社長のニートウェさんの奥様や社員の高橋七海さんの案内で授業風景を見学、参加者で一番若い中島一咲君が生徒さんからの質問に答えるという場面もあった。

その後、アメトーワの経営するピーナツオイル工場へ。この工場長は以前新橋のすっぽん料理屋で働いていたとのこと。今やミャンマーNo.1のピーナツオイルメーカーとなっている模様。容器のペットボトル制作からの一貫工程を見学。

昼食はホットポット鍋。評判上々。

昼食の後はボージョーアウンサンマーケ

のち、食事に移動。

食事の際、次回の寄贈予定先のピンムーンの村人3人からプレゼンテーションを受けるが、要領をえないため終了後現地視察。とんでもない山道を土ほこりをたてて車で移動する。たしかに幼稚園の建物はボロボロで建て替えたほうがいいとは思ったが、どこに建てるか等まだ決まっていない様子であったためいったん保留、後で計画書を送ってもらうことにする。

この後、車と船で、今夜の宿泊先であるインレー湖の湖上ホテルに移動。次回寄贈予定先の視察が入ってしまったため時間がおてしまい、船に乗るときにはすでに夕方6時を回っていた。3人と4人の2組に別れてエンジンの付いた小船でホテルに向かったが、結構時間がかかり(1時間弱)、途中宵闇せまるインレー湖で夜空に輝く星々を眺めていた時は、はるか太古から続いてきたと思われる風景に、時代感覚がまたくなくなっていた。

4日目(3月25日)、宿泊先のインターフォーティングホテルから船でまず近くで開かれていたナムパンの「五日市」に向かう。果物はもとより農機具、果ては家庭薬まで売っていた。売り手も自分の持ってきたものを午前中に売ってしまい、必要なものをまたここで買って帰るという。岸辺に豚が1頭、ウリをおいしそうに食べていたが、さすがにこれは売り物ではなかったよう。



次に船はインポーコンの織物工場へ。バスの茎から繊維を取り、織物にするという工程を見学、私も100%蓮の繊維できだした布を購入、仏壇に供えることにした。

湖上レストラン「GOLDEN KITE」でイタリア料理の昼食の後、以前寄付していたゴミ焼却炉が稼働しているか確認のため、マインタウクに立ち寄る。途中、インレー湖の浮島農園を見るが、水路にはホティアオイがかなり繁茂していて、船が行きかう

のもやっとという場所もあった。

マインタウクの桟橋からの途中の辻でたむろしていた若者に、ゴミの回収状況を尋ねる。ゴミ集めはしているという。確かに道に捨てられているゴミは、以前と違って格段に減っているらしい。辻を回ってすぐに野焼きの煙が目に入ってきた。近くにいた男性(小学校の事務員らしい)から、「毎週土曜日には小学生とゴミ集めをして、焼却炉で焼いている」と話を聞く。

このあと船でニヤウンシュエに戻り、ヘーホー空港からマンダレーに向かう。夕食はマンダレー旧王宮近くの「ゴールデンダック」で中華料理。隣のテーブルにはなぜかこんな時間に食事するはずもないお坊さんがいた(外国の僧侶らしい)。夕食後は今夜の宿泊先である「ホテル ヤダナー ボン マンダレー」へ。



5日目(3月26日)はワチの吉岡先生を訪ねる。まずザガインヒルにある「戦没者慰靈塔」を参拝し、全員で般若心経を唱える。その後ワチの病院に行き、森先生の全体説明・案内の後、近くのお店で、手術の合間の吉岡先生にお話を聞く。

中島一咲君からの質問に丁寧に答えてくださり、最後に気さくに写真に入ってくれました。この時の9人分の紅茶代を、隣のテーブルにいた入院中の乳がんの患者さんの家族の方が払ってくださったのに恐縮。吉岡先生から「これも功德を積むということですから」という言葉が非常に重く感じられた。

その後マンダレーに戻り、「旧王朝」の移築した建物の彫刻の見事さに感心し、世界遺産である「ワードオバゴダ」の729の仏塔の中にある経典の石碑に感動した後、マンダレー空港からヤンゴンに向かう。

ヤンゴンの「10マイルレストラン」でニートウェ社長と食事、お土産までいただく。(このピーナッツのあこしは、持ち帰った日本でもおいしいと好評だった。) ここで中島さん親子は空港へ、我々は宿泊先のサミットパークビューホテルに向かう。

7日目(最終日、3月28日)までは竹花さんが洋裁教室を開いている教会に行く。5日前には活動の場所がないとあっしゃつていた竹花さんの行動力に一同感心。ここで頂いた牛乳が大変おいしかった。

その後、日本人墓地参拝(ここでも般若心経唱和)のあと、郊外の「トンテ孤児院」に行く。子供たちが、食事をせずに我々の到着を待っていた様子。食事開始の「食べさせてあげる」儀式に参加。本堂に集まつた袈裟を着た小さな男児100人近くや、食堂に集合のピンクの袈裟を着た尼さんの女児を含む数百人が、一斉に食事する風景はまさに壯観。現在は「水かけ祭り」で帰っている子も多く、実際は1500人いるという。

その後少し離れた「ドリームトレイン」に行き、ボランティアの斎藤先生の案内のあると、日本からのお土産を贈呈。空港近くの夕食会場「フレンドシップ・レストラン」に向かう。ここで現地で視覚障害者の支援活動「なごみ(和)」を経営している蘆田さんに話を聞き、その後ヤンゴン空港へ。出国手続きを終え、羽田に向かう。



日本ミャンマー豊友会の日頃の活動は Facebook をご覧下さい ▶

日本ミャンマー豊友会 検索

**参 加 者 第32回 ミャンマースタディーツアー  
募 集 [11月13日から11月17日(仮)予定]** 詳細はFacebookまたは、ホームページをご覧ください。



〒442-0826 愛知県豊川市牛久保町城下73番地(大木産業株式会内)  
Tel. 0533-85-3358 Fax. 0533-85-4986 E-mail jamahajapan@gmail.com  
<http://www.hoyukai.com/myanmar> ▶▶▶▶▶  
Facebook <https://www.facebook.com/JAMAHJA.jp>

日本ミャンマー豊友会 検索

